

幼児期と感性 —絵本の読み聞かせからのアプローチ—

永井 孝子

はじめに

幼児期の教育は一人一人の幼児がもつ個性の花を咲かせることであろうか。あるいは将来、立派な実を結ぶための準備なのであろうか。この時期に重視したいことは、次の事柄である。今を十分に生き、またこれからも豊かに生き抜くための丈夫な根を育てることである。保育所保育指針の保育の目標の項には次のように示されている「子どもは豊かに伸びていく可能性をそのうちに秘めている。その子どもが、現在を最もよく生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培うことが保育の目標である。」と。植物は根を伸ばした長さに即して茎を伸ばす。人生の根っこは何であろうか。物事の価値や人の心を感じ、そして考え、表現する力をはぐくむ基盤となるものではなかろうか。「感性」については様々な場で多様に述べられている。今回はこの感じる心・考え・表現する力を総称して感性ととらえた。

1 研究の目的

前述の考えに基づき、次の2点を目的として研究を進める。

1. 幼児期の感性がどのようにはぐくまれていくのか。そして、幼児を取り巻く大人、教師はどのような援助を行えばよいのかを探る。
2. 「幼児を見つめる眼」「幼児をとらえる力」を学ぶ教職科目「幼児理解」の授業の充実に生かす。

II 研究の方法

1. 幼児期と感性に関わる先行研究の内容を整理する。
2. 幼稚園教育に於ける絵本の読み聞かせの実践から幼児の感性の育ちについて分析・考察する。

III 研究の結果と考察

1. 幼児期の感性と絵本との関わり

(1) 幼児期の感性

①小林登氏(国立小児病院名誉院長)は永年の胎児、乳・幼児期の研究から子どもの成長・発達について次のように述べている。人間は生まれながらにして、心と体のプログラムをもっている。心のプログラムにとっては情報が重要であり、身体

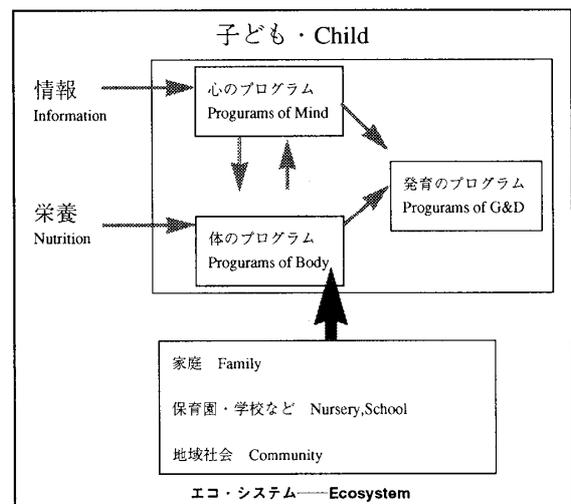


図1 (2)・p.13

としては栄養が重要になる。子どもが育つ家庭、保育園、学校、地域社会の情報が重要な役割を果たしている。これを図式化すると図1のようになる。

言い替えると、人間はインフォメーションシーカーとしての存在と表現している。生まれたばかりの赤ちゃんは、産声がおさまると周囲を見回し始める。これは子どもが情報を求めている姿と言える。情報は心をつくるもの、脳の成長・発達を促すものである。そしてこの情報には、感性の情報と論理の情報とが考えられる。

<感性の情報>

乳児期には基本的信頼感を育てよと様々な研究で報告されている。この信頼感を育てるには、やさしく育てる、つまり大人のやさしい存在が必要である。おそらく、信ずるというような心のプログラムを中心に、いろいろな脳のばらばらになっていたものをつなげているのではなかろうか。心の理論が3、4歳になるとできる。つまり、他人の様子を見てその人のもっている心を理解することができるようになる。こういったものをつくるプロセスも心のプログラムの組み合わせであろうと考える。

<論理の情報>

感性の情報によってはぐくまれた基本的信頼感を更によりよいものにしていくことが、学校教育現場の中で行われているのではなかろうか。つまり教育の方法論の技術を駆使して情報を論理的に提供し、脳の発達を促していると考えられる。

シナプス(神経繊維の突起が神経細胞にくっつく場所)の年齢的变化—図2—によると、4・5歳まで

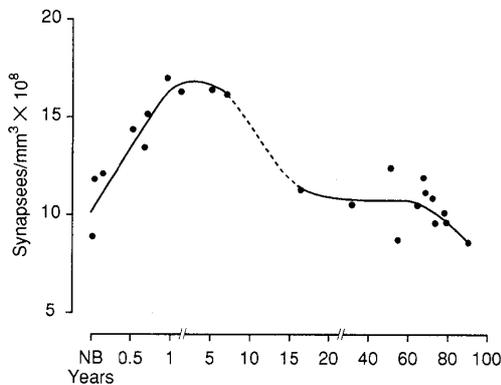


図2 (2)・p.12)

はシナプスは急速に増えている。15歳位から横ばいになり、60歳位を過ぎるとその数はかなり減少する。

またシナプスと大脳皮質との関わりを考えると、信ずる、考える、真似る、学ぶ、覚えるといった高度な精神機能のプログラムがその情報を取り込んで大脳皮質のコントロールにもっていくとき、発育・発達に重要な役割を果たしている。

人間は生得的な力をもち、環境によって生得的な力を拡大していく存在と考える。脳の発達を考える時、3～5歳位までの感性の情報を重視することの大切さが分かる。

②澤口俊之氏(北海道大学医学部脳科学専攻教授)はその著書「幼児教育と脳」(文春新書)では生後から8歳頃までを感受性期とし、直接体験による豊かな情報によって脳の発達を促すことの重要性を述べている。そして、これが心=感性と知性を育てることであると言っている。これはヒト大脳皮質(前頭連合野)におけるニューロン数(密度)及びシナプス数(密度)の年齢変化のデータを集めた結果、高密度になる時期が8歳頃までとなっているのである。

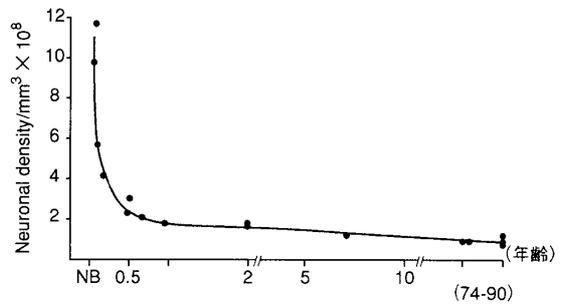


図3 (3)・p.73)

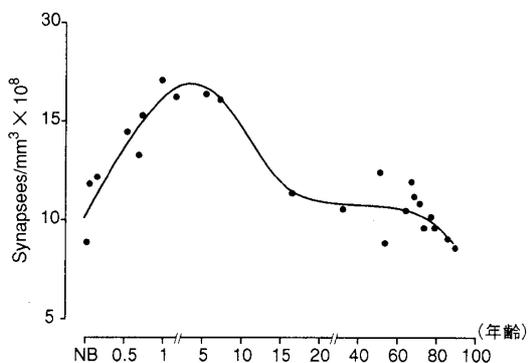


図4 (3)・p.75)

感受性期の子どもたちが、直接体験による豊かな情報を得るには、どのようにしたらよいのであろうか。澤口氏は次のように述べている。

- ア. 一人一人の子どもなりに好奇心を伸ばすこと。つまり、熱中して楽しめることを獲得してやること。
- イ. 一人一人の子どもがもつ夢(未来指向性)をはぐくむこと。

これらは、一人一人の幼児を尊重し、遊びを中心とした総合的な指導を目指す幼稚園の教育に通ずるものであり、ア・イの事柄については現場の実践研究からも多々報告されている。

(2) 絵本のもつ価値

大人が子どもに絵本を与える時はそれなりの目的をもつ。例えば「経験を広げ・深めるきっかけ、知的好奇心をはぐくみ知識を豊かに、想像力や豊かな心情をはぐくむ、人とのかかわり、言葉の獲得」などの教育的価値である。また、読んでもらった経験をきっかけに自分で絵本を選んで見たり読んだりする段階になると、「様々な心情・意欲・態度・知識のはぐくみ、人とのかかわり」などの育ちが考えられる。つまり、目的をもった手段としての価値(絵本の読み聞かせ)と体験そのものの価値(絵本を見る、読む)である。

(3) 幼児期の絵本の思い出

一本学児童教育学科の学生のレポートより—

学生1 絵本を読んでもらった思い出についてレポートを書いてもらった。いくつかのレポートの一部を紹介したい。

毎日夜寝る前に母からグリム童話を読んでもらった。一晩に一話読んでもらうのだが、いつも途中で眠ってしまったから未だ私のグリム童話は完成していない。でも母の温かいぬくもりが今でも忘れられない。

学生2 隣に住んでいた祖母が大好きで、毎日のように出かけて絵本を読んでもらった。

縁側で祖母のひざの上に乗って、庭に実った柿を食べながら読んでもらったムーミンの絵本が忘れられない。

学生3 いわさきちひろが描いた人魚姫の本がとても好きで、毎日繰り返し読んでもらい、今ではぼろぼろになっている。ちひろの絵の色彩とシンプルさがとても鮮明に残っている。もちろん、読んでくれた母の声の響きも耳に残っている。

これらのレポートから考えると、絵本の思い出は題名、内容はもちろんであるが、更に、それに関わった人、読んでもらった時の状況が残っていることが分かる。これらが、人の心の中、心の像いわゆるイメージとして蓄積されていく。つまり、読んでくれた人の温もり、読んでもらった時の雰囲気、絵本のもつ面白さ・楽しさ・美しさ等がイメージ(心像)として蓄積されるのである。

ここで、これまでに述べた「感性」についての考え方、学生がレポートした幼児期の絵本の思い出、絵本のもつ価値を総合して考えてみると、幼児と絵本との関わりが感性の育ちにつながっていくためには、読み聞かせをする大人の存在が極めて重要であることが分かる。

2. 絵本の読み聞かせと感性の育ち

(1) 事例の分析・考察

次に幼児の側に立って絵本をとらえてみる。

事例1—絵本をきっかけにした様々な表現活動—

○絵本 「10びきのかえる」 PHP 研究所

○対象・時期 5歳児・11月

○指導者 永井麻理(東久留米市立下里幼稚園)

○絵本の選択の意図

- ・園内で飼っているザリガニや生活に身近なオタマジャクシ、カエル、チョウなどの生き物が出て



- くるので、幼児が興味や関心をもちやすい。
 ・様々な表現活動に発展する可能性がある。

○ストーリーの概要

10ぴきのオタマジャクシがつかまってコンクリートの池の中に入れられてしまいました。オタマジャクシたちは、生まれたひょうたん沼に帰りたいと何度も叫んでいます。池に住んでいるキンギョが出てきてカエルになったら帰れなさいと教えてくれました。ある日、オタマジャクシはカエルになり、石の上に乗って沼を探しました。ひょうたん沼に帰ることにしましたが、どっちに行ったらよいか分かりません。そのうちカタツムリに出会い、道を聞きましたが、教えてもらえませんでした。次にチョウチョに出会って聞くと、林を抜けて丘を越えてと、教えてくれました。カエルは大喜び、ピョンピョン、林を抜けて丘を越えて、小川の岸に辿り着くことができました。喜んで水の中に飛び込むと、草の陰からザリガニが現れました。驚いて土手の上に逃げました。水の中にはザリガニがあちこちにいて泳いで帰ることができません。そこで、みんなで力を合わせて舟を作りました。舟に乗って下っていくと滝があり急に流れが速くなりました。その流れの勢いで下に落ちてしまいました。落ちた所は大好きなひょうたん沼でした。カエルの仲間が集まってきて大喜びでした。

○分析・考察

○様々な表現活動への広がりの実態

ア. 鬼遊びへの広がり

絵本に登場するザリガニ、カタツムリ、カエル、オタマジャクシ、キンギョになって逃げたりつかまえたりする。

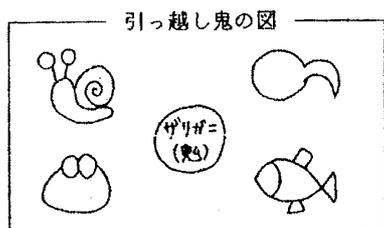


図5 (4)・p.15)

○幼児の活動の様子

- ・「ひょうたんぬまの引越し!」と言ったら「みんな引越しするんだよ」と教師が遊び方を説明した後、「ひょうたんぬまの引越し!」と言うと、キヤーキヤー言いながら全員引越す。
- ・教師はA児を捕まえてザリガニの仲間にする。それを見てB児は、自分と同じキンギョのC児に「気を付けろよ、A君はC君よりも速いからな」と忠告する。
- ・D児とE児はどこに引越すか相談し「カエルの家にしよう」と決める。
- ・F児は「♪オタマジャクシはゲロゲロ」とカエルの真似をしながら歌う。
- ・G児は走るのが速く、なかなか捕まらないので、「G君がんばれ」と声援がとぶ。
- ・H児は「ぼくカタツムリ!強いぞ!!」と自信満々に言う。

イ. お話づくりと劇遊びへの広がり

教師と一緒に「カエルのぼうけん」の話をクラス全員でつくる。この話に振り、言葉、踊りなどをつけて演じる。

○話の概要

あるところに、とってもかわいそうなオタマジャクシがいました。「エーン、おかあちゃん、どこに行っちゃったの。お家へ帰りたいよ。ひょうたんぬまへ帰りたいよ。」と泣いていました。そこへキンギョがやって来て「オタマジャクシさん、そんなに泣かないで、オタマジャクシはカエルの子、カエルになったらひょうたんぬまへ帰れなさい。」

♪ オタマジャクシはカエルの子
 チョロチョロ泳ぎが得意です
 仲良く遊んでいるうちに
 やがて手が出る足が出る ♪

「やった!ぼくたちカエルになったぞ!でもひょうたん沼へ行く道が分からない。」そこへカタツムリがやってきました。 —後略—

○幼児の活動の様子

- ・壁面の絵を見ながら教師の話聞くことによって、クラス全員が共通のイメージをもち話を理解している姿が見られる。

- ・教師の問い掛けに答えたり、みんなで歌を歌ったりして話の展開を楽しんだり、個々にイメージを膨らませたりしている。
- ・自分が考えたり感じたりしたことを教師や友達に伝え合っている。



図6 (4)・p.9)

○これらの実践から考えられる感性(感じる心・考える力・表現する力)のはぐくみ

- ・それぞれの役のつもりになって言葉や身振りで表現したり、逃げたり捕まえたりすることを楽しむ。
- ・様々な表現活動の中で感じ・考えたことを伝え合う、励げまし合う、認め合う、思いやるなどする。そして互いの姿に改めて気付きながら、友達とのつながりを感じ深めている。
- ・教師や友達と一緒にストーリーをつくっていく楽しさと、つくり上げた満足感・達成感を味わっている。
- ・自分たちで演じたり発表会で見せたりすることによる楽しさ、満足感を味わう。

事例2—絵本を通して感じ・考え・表現する力をはぐくむ—

○絵本 「ぼくおよげるんだ」 あかね書房



○対象・時期 4歳児・7月

○指導者 山口清美(東久留米市立大道幼稚園)

○絵本の選択の意図

- ・水遊び、プール遊びを楽しみにしている幼児が多い。一方、不安をもっている幼児もいる。そこでいずれの幼児も水遊びプール遊びに親しみを感じ、期待をもつようにしたい。

○ストーリーの概要

くまたくんはお父さんと公園のプールに行きました。奥の方からヒューン、キュンキューンと叫んでいる声が聞こえると、くまたくんはびっくりしてお父さんの手を握りました。にぎやかだねえと言いながらお父さんはくまたくんをプールの方へ引っ張って行きました。更衣室で水泳パンツをはいてからシャワーの所に行きました。シャワーとシャワーの大雨です。シャワーの勢いがあまり強いのでくまたくんは怖くなりました。いやだいやだ、シャワー冷たい。くまたくんは大声で言いました。ぼく家に帰る、いやだよー。くまたくんはカバのような口を開けて泣き叫びました。シャワー、冷たい水がくまたくんの頭にも耳にも目にも鼻にも口にも肩にも胸にも背中にもお腹にも足にもシャワー。ママ助けてー、くまたくんは大声で泣きました。くまたくんどうしたのプール面白いよ、とのきちくんがそばに来て言いました。

くまたくんはプールを眺めました。みんながあまり楽しそうなので入りたくなりました。そーら飛び込むぞ、お父さんはくまたくんを抱っこして飛び込もうとしました。いやだよー、びっくりしたくまたくんはお父さんにしがみつきました。アハハうそだよと言ってお父さんはくまたくんを抱っこしたままプールのはしっこからそろりそろりと降りました。

○感じ・考え・表現する力をはぐくんでいる実態



図7 (4)・p.12)

・表紙の絵を見たり、教師の「くまの子がいるね」の言葉掛けに主人公に関心をもつ。



図8 (4)・p.12)

・自分の経験と重ね合わせながら感じたこと考えたことを表現している。



図9 (4)・p.12)

・主人公の気持ちに共感している。
・主人公と自分を比較して楽しさを感じている。

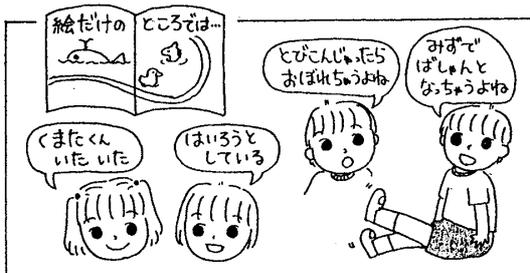


図10 (4)・p.13)

・言葉のない場面では絵に集中し、気付いたことを教師や友達に言葉で伝えている。



図11 (4)・p.13)

・自分の思いや考えを教師や友達に伝えながら共感している。

(2) 幼児にとっての絵本

以上、幼稚園での絵本の読み聞かせの実践から次の事柄が分かった。

幼児は絵本の楽しさを味わうと、言葉やしぐさなどでそれを表し、だれかに伝えようとする。また、絵本の美しさ、ストーリーの面白さ、楽しさなど幼児一人一人の興味や関心のもち方、感じ方は様々で、その子なりの受け止め方で感性がはぐくまれている。したがって幼児を取り巻く大人は、幼児に絵本への興味や関心を育て、幼児の感じ方をよく受け止めて理解しようとするのが大切である。それには、日頃の幼児との関わり合いから理解を深めていく努力が必要である。更に、幼児は絵本ならではの魅力に触れて喜んだり感動したり経験を広げたりイメージを蓄積したりする。つまり幼児にとって絵本は、幼児の生活や遊びを豊かにしていく糧であると言える。

まとめ

ここに掲載したいくつかの感性に関わる学説と幼稚園現場の実践事例から次のことが考えられる。幼児がどのように絵本と関わって絵本そのものを楽しみ、更に経験を拡大していき、どのようなイメージが蓄積されていくかが、感性のはぐくみと密接に関連する。

例えば次のようなプロセスが考えられる。

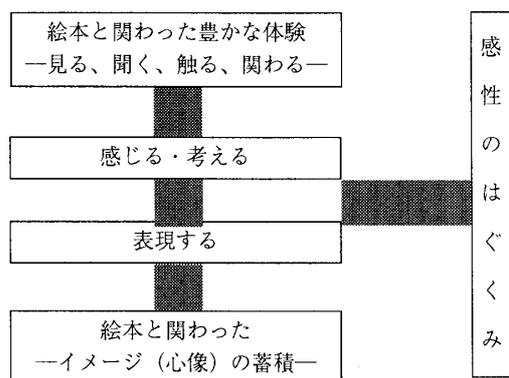


図12

これらのプロセスを一人一人の幼児なりに丁寧に
見つけ、援助することが大切であろう。

また、心理学者や脳科学者が述べている幼児期の
発達課題、つまり自発性と自立感を考える時、「感性」
はその原動力となるものであろう。そして絵本は原
動力となる要素を多々備えている。しかし、絵本の
もつ感性の育ちへの原動力を実際に始動させるため
には、絵本を選択し読み聞かせる大人の存在が重要
であることが明らかになった。それは一人一人の幼
児を大切に「やさしさ」に代表される大人の感性と
これまでに培ってきた大人の知性が介在すること
なのである。

今回は幼稚園での実践から分析・考察を試みたが、
家庭や地域に於ける幼児と絵本とのかかわりについ
ても、これらの視点から研究を進めたい。

参考・引用文献

- 1) 厚生労働省 1999 改訂保育所保育指針 フ
レーベル館
- 2) NHK放送文化研究所編 2002 国際シンポジ
ウム「子どもが育つ情報社会をめざして」の記録
- 3) 澤口俊之 1999 幼児教育と脳 文春新書
- 4) 東久留米市研究奨励費受給研究推進園研究集録
1998 幼児の生活や遊びを豊かにするための指
導のあり方を探る 永井孝子監修 東久留米市立上
の原幼稚園発行
- 5) 秋田喜代美 1998 読書の発達心理学 国土社
- 6) 文部省 1999 幼稚園教育要領解説
- 7) 桑子敏雄 2001 感性の哲学 NHKブックス
- 8) 永野重史 2001 発達とは何か 東京大学出版会